

## 引用を学ぶ基礎の段階の大学生の文章に見られる諸問題

著者	大島 弥生
雑誌名	専門日本語教育学会研究討論会誌
巻	19
ページ	24-25
発行年	2017-03-03
権利	Posted with approval of The Society for Technical Japanese Education
科学研究費研究課題	人文・社会科学系論文での引用・解釈構造解明と論文作成支援のための教材化
研究課題番号	15K02635
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1342/00001615/">http://id.nii.ac.jp/1342/00001615/</a>

# 引用を学ぶ基礎の段階の大学生の 文章に見られる諸問題

Problems of Quotation by Japanese University Students in the Basic Academic Writing Course

大島 弥生<sup>※1</sup>  
OSHIMA, Yayoi

キーワード：引用、大学生、レポート、アカデミック・ライティング  
Keywords: quotation, university students, essay, academic writing

## 1. はじめに（背景および目的）

留学生のみならず、日本語母語話者大学生においても、論文やレポートを作成する際に、引用が大きな困難点となり、しばしば剽窃が問題となることについては、すでに多くの指摘がある（大島<sup>1)</sup>ほか）。各種の教科書や手引書の中で、引用の文型として、「筆者名（刊行年）は～と述べている／としている」「筆者名（刊行年）によれば／よると、～（という）。」の2種はほぼ必ず紹介されており、授業でも注意喚起されているにもかかわらず、この問題は根絶されていない。

本発表においては、引用を学ぶ基礎の段階の日本語母語話者初年次大学生の文章を対象とし、そこに見られる諸問題を分類すると同時に、課題実施後の振り返り記述の分類を行い、引用の基礎的な課題に取り組んだ初年次大学生が引用の何を困難と感じ、何を新たに学習したと捉えたかについて、考察を試みる。さらに、その結果をもとに、留学生を含めた引用の基礎段階の指導・課題に盛り込むべき要素について提案を行う。

## 2. 調査の対象と方法

対象者は、大学初年次前期必修の日本語表現科目に参加した母語話者大学生 40 名である（履修者総数は 45 名であったが、データの揃った 40 名分を調査対象とした）。学習者は 15 週の授業の各段階で、選んだテーマについての資料や情報を収集し、アウトライン、パラグラフ・ライティングの指導を受けた後に下書きを作成、それをもとに全員が 3 分間のスピーチを行い、完成稿を PC で作成して提出した。授業は大島ら<sup>2)</sup>を教材としており、進め方および引用の例文提示も同書に

基づいている。なお、教材においては、要約引用の例文と「」のある直接引用の例文をともに複数例、引用記号は著者名＋公刊年の方式と上付 1/4 角の文献番号を用いた方式の双方が紹介されている。

課題①では、第 9 課にあたる授業の中で、引用のやり方についての基本的な教示を受け、さらに日本における魚食の実相に関する学術雑誌記事<sup>3)</sup>を読み、記事筆者から内容に関する解説を聞いたのち、食生活の変化の要因についての筆者の見解を記事の中から要約して引用するよう指示された。また、引用の文に加えて、「つまり」などの接続詞とともに、自分の提案や意見も書くように求められた。さらに、当該記事の出典を、論文文末に示すような引用文献リストの書式で記載することも求められた。教材例示の参照は許可された。課題①実施後、振り返り記述を行った。

授業における課題①実施の 2 週間後に期末試験として同じ記事に基づく課題②に取り組み、要約引用に加えて自分の提案や意見も述べるよう指示されて記述し、同記事を引用文献リスト書式で示した。課題①②とも文とリスト作成の時間は 15 分程度である。課題②では教材の参照は許可されていない。要約引用と提案の正解例には下記のようなものがある。

課題②の「ほぼ問題なし」と判定された例：

馬場（2015）は、魚離れの要因について、核家族化で魚介類の調理法の伝達が困難となり、また、鮮魚売場が量販店に変化したことで、対面での魚介類の調理法の伝達が困難になったことから、生鮮魚介の調理離れが起きたと述べている。

このことから、私は、魚離れをなくすために、魚

※1 東京海洋大学 学術研究院教授

の調理法を広く浸透させることが必要だと考える。例えば、…

### 3. 結果および考察

教材を参照しながら作成した課題①において、過半数の学生は大きな問題のない要約引用と文献リストを作成したものの、一部の学生には、要約引用と意見部分の混在や、引用記号の誤りや文献リストでの書誌情報の提示順の誤り等の問題が見られた。

教材参照なしで行った課題②の文章部分についての結果は、40名中11名(27.5%)が「ほぼ問題なし」、15名(37.5%)が「やや不自然」、14名(35%)が「問題あり」と判定された。「問題あり」18件(1名に複数のケースあり)の内訳は、図1のとおりであった。

①「引用記号の不備」は、「(馬場 2015) は、」「と馬場<sup>\*1</sup>(2015) は述べる。」というように、記号の位置・形態・重複などにルール違反が見られたものである。⑤「論文筆者への敬称」である「馬場氏は」と同様、形式に由来するミスであり、矯正は容易である。

一方、②の「によると／よれば…と述べている」は、記号に比べ、文のねじれに由来する点で問題がある。③の引用とすべき箇所マークがないケースは、引用の意義を理解せず、結果的に剽窃となっている点で最も問題が大きい。二文以上の引用で陥りやすい。

また、「やや不自然」のうちの多くは、要因の引用の際の名詞句化の並列のアンバランス(例:名詞句+動詞節「核家族化の進行や鮮魚売場が鮮魚小売店から量販店へと変化したことによって」等)であった。これも②と同様に文自体を正しく書く力が要求される。

つぎに、引用を学ぶことをどう捉えたか、課題①を行った後の振り返りを見ていきたい(論文や研究そのものへの感想は除く)。振り返りの内容のうち、引用に関する言及は59件あり、うち25件が「引用のルールを知った・今までの引用は間違っていた」等の新規の学びに、13件が引用表現の多様さに、11件が引用のあとに意見・解釈・総括を書く必要性に、10件が要約引用の学びに言及していた。このように、母語話者であっても初年次段階では、引用のし方は未習であり、特に要約引用や引用のあとに意見・解釈を書くことについては新たな気づきであったことがうかがえる。

表1 課題②における引用の問題

①引用記号の不備	6件 (33.3%)
②によると+引用動詞	5件 (27.8%)
③引用と考察の区分の不明確さ	5件 (27.8%)
④引用+考えられる	1件 (5.6%)
⑤論文筆者への敬称	1件 (5.6%)

### 4. 教育への示唆

論文を書こうとする段階の大学生・留学生であれば、論文とは何であるか、なぜ他者の知見を引用という形で明確に区分する必要があるのかについては、理解が進んでいるといえよう。一方、今回の対象者のような低年次の場合、大学生・留学生いずれも、振り返り文で示された通り、学術論文で使われる引用の形式自体が初見であるケースが多く、その意義も十分には理解していない。さらに、引用と明確に区分しながら自己の意見や解釈を展開するところまでセットとなった練習は、多くの教材では提示されていない。また、直接引用だけでなく、名詞句による要約やその並列の整合性の確認を伴う要約引用の困難さも確認された。留学生に対しては、母語話者に増して、このような文法上の整合性への注意喚起が必要といえよう。

この結果から、留学生・大学生どちらに対しても、低年次からの論文での引用形式への注意喚起、意義の理解の促し、名詞句の並列を含めた要約引用(二文以上を含む)の練習とそれに加えた意見・解釈部分の作成の練習を繰り返すことが重要であるといえる。

(yayoi@kaiyodai.ac.jp)

謝辞 科学研究費助成 15K02635 の支援を得た。

### 参考文献

- 1) 大島弥生: 大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス, 言語文化と日本語教育, Vol.33, pp.57-64 (2007)
- 2) 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏徳: ピアで学ぶ大学生の日本語表現[第2版]—プロセス重視のレポート作成, ひつじ書房 (2014)
- 3) 馬場治: 魚離れの実相, 生活協同組合研究, Vol.474, pp.5-12 (2015)